

まちづくり ひろしま

第57号 (令和4年1月15日)

読者数：666名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！



○サッカースタジアムの発掘現場
2021年11月27日現地見学会



○第3回広島市平和祭再現劇
主催者あいさつ



○Hihukusho ラジオ報告
被災前の大川地区、中央が小学校



○大イノコ祭りトークライブ
YouTube 配信画面

目次

- 巻頭言：遺跡の保存と開発の調和を考える……………広島大学名誉教授 藤野次史
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・サッカースタジアムの経済波及効果の試算
 - ・広島市中央図書館、広島駅前の百貨店に移転方針
- 広島復興の軌跡・人物編：丹下健三氏 その1：編集委員 石丸紀興
- ほっとコーナー：手先を使う「好き」……ステンドグラス技能工芸士 三岳みさ
- シンポ「広島サッカースタジアム建設予定地発見の近代遺構を考える」報告
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 只野哲也 (大川小学校東日本大震災被災者)
- 「第31回時代を語り建築を語る会」の報告
- 若い人たちの活動報告：大イノコ祭りトークライブ (オンライン)
- 本「ヒロシマを暴いた男 米国人ジャーナリスト、国家権力への挑戦」の紹介
- 編集後記：編集委員 前岡智之

□ 巻頭言

遺跡の保存と開発の調和を考える

広島大学名誉教授 藤野次史

広島市は世界に知られた国際平和都市である。原爆ドームがその象徴であり、平和の大切さを発信し続けている。しかし、原爆投下の原因となった巨大な軍事都市としての側面は、あまり積極的に語られることはない。広島城本丸跡に大本営跡がひっそりと残されているが、臨時帝国議会が開かれるなど首都的な機能をもった時期があったことは広島市在住者でも知らない人が多いかもしれない。広島市が軍都となったのは、半島・大陸に近く、瀬戸内海に面し、中・四国地方中央部に位置するという地理的な要因はあるにせよ、城下町として発展したことが関係している。その意味で、復元広島城は広島のもう一つのシンボルである。

広島城下の人口は、文政年間(1820年ごろ)に7万人前後、明治12年(1879)に約7.6万人で、江戸(東京)、大阪、京都、名古屋、金沢に次ぐ位置にあった。江戸(東京)、大阪、京都は別格としても、日本を代表とする大都市の一つであった。明治政府は国内反乱鎮圧と対外防衛のため、全国に鎮台を配置した。明治6年(1873)に6鎮台の一つとして広島に鎮台を置いた。師団制導入後、広島に第五師団が配置され、第二次大戦終結まで中四国の軍事拠点として機能した。明治以降、広島が軍事都市として大きく発展したことは疑いないが、その基礎が城下町にあり、日本の有数の大都市であったことが、鎮台が置かれた理由の一つとみて間違いあるまい。

さて、鎮台が設置されるにあたり、それまでの軍事・政治の中心であった近世城郭が利用されたのは必然的な成り行きであり、広島鎮台も広島城本丸跡を中心に施設が配置され、時代とともに旧陸軍施設が拡大され、巨大な軍事施設が形成された。その中心的施設の一つが、広島サッカースタジアム予定地の発掘調査で発見されたのである。すでに、多くの方が見聞きされたことと思う。発見されたのは旧陸軍中国軍管区輜重兵補充隊(以下、輜重隊)の施設の一部である。今回発見されたのは、厩舎跡を中心に、馬飼育に関連する水場遺構、兵舎跡や厠・洗面所跡などの建物遺構などである。遺構の多くは輜重隊施設の配置略図の各施設に対比可能な状況で、きわめて良好な遺存状態を示していた。全国的に見ても、軍の中心施設が発掘調査された例は数えるほどで、厩舎跡の類例もきわめて少ない。広島を語る上できわめて重要な歴史的資料であるだけでなく、質、量ともに全国有数の事例である。

ところで、サッカー専用スタジアムは広島の人々のサッカーファンだけでなく、広島の人々の待ち望んだ施設だ。20年来の悲願と言ってもよい。紆余曲折の後、現在の地に決定された。問題は、その決定にあたって、その場所の歴史的な背景が全く考慮されなかったことだ。事前に国史跡広島城跡の隣接地という立地が十分に検討されていれば、もっと別の展開があったはずである。その結果として、きわめて貴重な歴史的遺産がスタジアム建設によって破壊の危機にさらされることとなった。

しかし、遺跡の保存、スタジアム建設、このいずれかを選択しなければならない問題なのだろうか。否である。すでに、その解決策について、話をしたり、文字にしたりしてきたので、ご存じの方もおられるかもしれない。繰り返しとなるが、遺跡保存と開発を両立した事例を紹介しておこう。もっとも参考になるのは、ギリシアの新アクロポリス博物館である。元々、有名なパルテノン神殿のそばにあったが、収蔵遺物の増加などから、麓に新施設が計画された。建設に先立つ調査で全域から新石器～古代の重要な遺跡が発見された。最終的に英断が下され、博物館の地下に全面的に取り込むことで遺跡を全面保存し、展示の一つとして整備した。現在、世界各地から見学者が訪れ、ギリシア観光の一翼を担っている。ヨーロッパでは歴史遺産と現代の生活を共存させている事例が多く、英国ロンドンの市庁舎遺跡(古代ローマ時代の闘技場)などビルの地下などにそのまま遺跡を保存し、開発と保存を両立させている。日本でも、大阪歴史博物館では、ビルの地下に難波宮跡関連の建物跡をそのまま残し、展示資料の一つとして利用している。

今回の輜重隊遺構についても、遺構をそのまま残しながら、スタジアムを建設することは十分に可能であった。もちろん、建物を支える柱を設置する箇所は遺構を一部壊さざるを得ないが、最小の犠牲でほぼ全域を保存することができる。同時に、広島にとってきわめて歴史的価値の高い遺構を保存し、それを整備して原爆ドームなどと一体的活用すれば、広島を国際平和都市とし

ての活動が一層稔りあるものとなったはずである。

しかし、今回の問題はこれで終わりではない。これまで述べてきたように、広島は広島城下町をベースとして発展してきた。さらに、広島城跡周辺の歴史は江戸時代以前に遡り、広島市中心部の地下には中世以来の遺跡が連綿と残されているのである。広島が今後一層の発展するために様々な開発は必要であるが、文化財（遺跡）の保存と開発を調和的にすすめ、豊かで文化的な環境を子孫に残すためには、長期的かつ明確なまちづくりのヴィジョンが必要であろう。

ひろしまのまちづくりの動き

① サッカースタジアムの経済波及効果の試算！

広島市はサッカースタジアムが開業後20年間で約6.760億円の経済波及効果があるという試算を公表。広島県が建設費の負担割合などを判断する材料として市に求めていた。

その内訳は、建設投資による効果が約460億円、開業後20年間の飲食、宿泊、交通、買い物などによる効果が約6.300億円という。前提条件として、スタジアムや隣接する広場エリアに年間310万人の来場者を想定している。

その結果、国、県、市の税収効果は約344億円の増収と見込み、そのうち県税収入は約78億円増で、市が想定するスタジアム建設費の県負担分44億700万円を上回るという。

来場者年間310万人という夢のような数字を根拠に作られた試算で誰が納得するであろうか。例え初年度頑張って310万人来場したとしても次の年度は半減し、鮮度が落ちていけば年々減少していくであろう。万が一このエリアに310万人が来場して金を落とすとしても、その分他のエリアが減少し、トータルの増収は微増にとどまるであろう。

経営アナリストの客観的なデータによりこの試算を検証していただきたい。

② 広島市中央図書館、広島駅前の百貨店に移転方針！

広島市は中央公園にある中央図書館、映像文化ライブラリー、こども図書館の3施設をJR広島駅前の商業施設「エールエールA館」に移転させる方針。

駅前には交通の便が良いので、遠方や郊外からの利用者は増えるであろうが、これまでの利用者の多くは商業施設の中の図書館に違和感を感じている。既存の百貨店を模様替えして、図書館機能が十分に発揮できるか否か、図書館の利用者と維持管理する職員と百貨店の買い物客が満足できるものになるか否か、具体的なスタディをした上で判断すべきである。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第29回）丹下健三氏の基本的発想を探る その1
～広島復興計画の神髄ともいえる平和記念公園に基本的な形と意味と役割を与え、世界にその存在を発信することを可能にしたのが丹下健三氏である。丹下氏が広島市においてインスパイア（吹き込み）し、指示し、巻き込んだ基本的発想内容を確認し、検討していきたい。（以下敬称略）～
はじめに

今回はまず平和記念公園における最も基本的な発想・コンセプトともいえる原爆ドームを貫通する軸線に注目する。これは、1949年における広島平和記念公園コンペティションで提案されたものであるが、このコンペの概要や果たした役割等についてはいずれ言及することとし、まずは部分的ではあるが重要な意味を有する軸線の意義について注目して考察する。そもそもこのような軸線は丹下自身の発想であろうか。どこかで適用されていないのであろうか、あるいは、今までこのあたりのテーマについてどの程度解明されているだろうか。

1. コベントリーで見た軸線

いきなり私の最初の海外旅行から始めさせていただきたい。それは1971年の夏、あるグループで3週間ほどイギリスと大陸（フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ）の建築と都市を見て回るというものであった。都市としてはイギリスのニュータウン見学が一つの重要なテーマであったが、同時に歴史的都市、新たな都市開発も重大なテーマとして追加された。

そして訪れたのがロンドンから西北西150kmのコベントリーという都市で、そこは第二次世界大戦中ドイツ空軍によって徹底的に爆撃・破



写真ショッピングセンター連絡デッキから尖塔(1971年筆者撮影)

壊され、その後復興計画のもとに再建された都市として有名であり、コベントリー市とは姉妹都市縁組は結ばれていないものの、互いに友好関係を維持している都市なのである¹⁾。

コベントリーの戦災については「1940年に始まったドイツ空軍によるイギリス本土への大空襲は、全国の建築物の約五分の一になんらかの被害をおよぼしたが、コベントリーにおけるその割合は、全市の建築物75,000戸中の約五分の四にあたる50,000戸に達した。被害がとくに顕著だったのは、同市における政治的・経済的・社会的活動の中核である市中心部 city center であり、270 エーカーの土地の約90パーセントが壊滅的打撃をうけた」とされる。そして驚くべきことは1943年、戦中であるにも拘らず、すでにイギリス政府はコベントリーを含めた7大戦災都市を選定して戦災地復興計画を進めたことである。コベントリーにおいてはすでに独自に1940年11月の大空襲の二週間後に市復興委員会を新設していた(参考資料①、②、③)。

復興計画については紆余曲折があり、市会参事のドナルド・ギブソン案と市土木課長のフォード案と2案が提示されたが、結果的にはギブソン案が採択され実現に移された。復興計画案は都市中心部に大々的なアッパー・プリシントと呼ばれる歩行者専用路を採用したショッピングセンターを配置するものであった。その歩行者専用路が十字形の形態で、その長軸の延長先に爆撃で破壊されたものの倒壊しなかったセントミカエル大聖堂の尖塔を位置づけたのであった。すなわち廃墟と、反対側にタワー型集合住宅を配置し、軸線を構成し、復興計画に内包したのである。

このような基本的構造であったが、セントミカエル大聖堂再建に当り、廃墟を解体して同じ場所に再建するか、廃墟を残して別の場所に(ほぼ隣接して)再建するかしばらく議論があつて、ようやく決着して廃墟を保存することが決定されたのである。

そしてこの軸線を1971年における私の海外旅行で見つけて圧倒され、痛く驚いたのであった。

実はコベントリーのショッピングセンター現場で、軸線が貫通していることに気付く人は少なく、指摘されて改めて見直し、納得するという程度であった。友好都市縁組も両者の復興計画の基本的発想である軸線が結ぶ縁であるという記述もなく、関係者も気づいていないようであった。両者を結び付けたのは共に著しい戦災・被災を受けた都市ということであり、復興計画の類似性をいう要素ではないのである。

2. コベントリーと広島

コベントリーにおける軸線と広島の平和記念公園における軸線、ともに戦争で破壊された廃墟を見据えており、ビスタ構成としての役割を担わしている。廃墟保存の位置づけは復興計画としての象徴的な役割でもある。ただしコベントリーの場合は尖塔の反対側にもビスタのストップポイントを置いて完結させている。平和記念公園の場合は片方に強い方向性を有して向かって原爆ドームが受け止めているといえる。

当時の丹下がこのコベントリー情報を認知していたかどうか、現段階では分からない²⁾。平和記念公園コンペにおいてアメリカのサーリネンのセントルイスのジェファーソン記念塔アーチ計画(1948年コンペ)を応用したことを考えれば(いずれ報告する)、戦後3年半あまりの中で、海外の建築関係の雑誌も少しずつ出回りつつあり、丹下は海外情報を熱心に収集していたことは推測できる。当時戦災復興院も「復興情報」という冊子を発行して全国の復興計画関係者に外国の復興情報も流していた。しかし、丹下がコベントリーで復興計画情報を知っていたとは考えにくい。イギリスと日本と独自に廃墟軸線が構想されたと捉えるべきであろう。コベントリーを訪れる人は是非とも見てきて欲しい。

3. そして丹下の着想は

軸線問題は、丹下研究第一人者である藤森照信にとっても重大テーマであった。その著(参考文献④)によれば、丹下との対話において、

藤森・松葉(一清):先生の計画案のすごいところは、100m道路と直交して原爆ドームを望む軸を通したところですが、それを思いつかれた時の記憶はありますか。

丹下:はっきりしていません。都市計画的に見て、100m道路がやはりベースになる。それからこの敷地の北東から45°の角度でここを横切る道は広島の銀座だった道で、交差路として残したい。(中略)それから原爆ドームをどう扱うかはなかなか出てきませんでした。しかし最終的に、100m道路と垂直な軸線を基本として展開しようと……。

藤森:【この広場を中心とする】つづみ形【の道路パターン】ですね。

丹下:戦争中のコンペで使っているんです。このつづみ形を使うと、敷地の中のネットワークが増えてきて、さらにセンターができるということが、だんだん分かってきましたね。そしたら、このセンターとドームを結びと100m道路と直角になるんじゃないか、ということで決まったと思います。このつづみ形を



カテドラルの廃墟

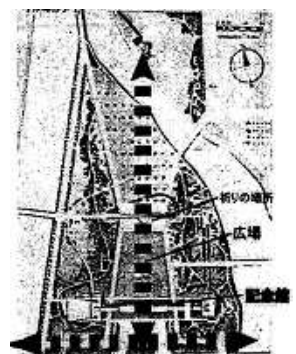


図 コベントリー復興計画と平和記念公園コンペにおける軸線構成

探し出したとき、何か解けるような感じがしたんです。そうするとメインのアプローチはここだ、広場にはゲートから入るようにしたい、じゃあ陳列館をそのままゲートにしようということで、ピロティであげたいんです。

と説明されている。すなわち、軸線は原爆ドームの存在とアプローチのつつみ形、さらにはゲートとしてのピロティ構成、これらが一体的に構想されたことを明らかにしている。軸線だけを取り出し、特別扱いしてはならないことを確認したい。

4. まとめとして

このような共に復興計画において廃墟を軸線で指向してアイストップにするという戦災都市コベントリーと広島とが、友好都市であることを今まで特別な意識で捉えてこなかったであろう。考えてみれば偶然であったかも知れないのであるが、極めて数奇で象徴的な関係ともいえる。広島を軸線を強調するだけでなく、是非とも、このような類似性の都市構造を世界に印象付け、誇れるような関係づけを目指してはどうか。

(編集委員 石丸紀興)

脚注 1)コベントリーでは8月6日をヒロシマ・デイとして大聖堂を拠点に集いが企画され、広島でも市民レベルでコベントリー一帯が設立され友好関係が維持されている。 2)もし丹下がコベントリー案を知って参考にしたということであれば、丹下の弟子たちが覚えているであろうが、もはやその情報は得にくいであろう。

参考文献:①石丸紀興著「コベントリーの戦災と復興計画/世界の戦災都市とその戦災復興都市計画に関する研究その1」(日本建築学会中国・九州支部研究報告第6号、昭和59年3月)、②石丸紀興著:「広島平和記念公園コンペにおいて入選した丹下健三グループ案の軸線構成とその意味に関する研究—コンペ入選当初案における軸線の構成とその後の変更の意味」(日本建築学会中国支部研究報告集第38巻、平成27年3月)、③長谷川淳一「英国コヴェントリー市における戦災地再開発政策の展開1940年-1945年」(社会経済史学、第56巻第6号、1991年3月)④丹下健三・藤森照信著「丹下健三」(新建築社、2002年)

□ ほっとコーナー

手先を使う「好き」

RONDEL Stained Glass ステンドグラス技能工芸士 三岳みさ

私は、小さなころから手先を使う「好き」なことをしてきた。

幼少時代はハサミが「好き」で、広告の写真でも、なんでも気に入った「好き」をきれいに切り取っては宝物箱に集めていた。

幼稚園時代から習い始めたピアノも、指を使う「好き」だ。

小学生時代は、そろばんを指ではじいていた。パチパチ指を動かすことが「好き」で、おかげで算数が「好き」だった。

父の影響で始めたソフトテニスも、グリップを握る手先の具合でボールをコントロールすることが「好き」だった。

水泳も、水を掻く手先で感じる水の感触が「好き」だった。

お絵描きも小さなころから「好き」で、学生時代は油絵を専攻し描いていた。筆を使って描くよりも、ナイフを使い手先の力加減で濃淡をつけるのが「好き」だった。

OL時代は、経理の仕事に就いたが、そろばんのおかげで計算「好き」と、パソコンのキーボード入力は、ピアノを弾いているようなという、地味な入力作業を、なんて能天気な感覚で楽しく仕事をしていた。

趣味で始めたステンドグラスは、それまでの「好き」が詰まった集大成!

ガラスの色選びは、絵の具で色を合わせていく感覚で選び、手先を使ってガラスをカットする。結構な重量になる作品を支えながらの制作は、テニスで鍛えた腕っぶしの強さでカバー。細かい地道な作業は、OL時代に淡々と事務をこなした感じに。出来上がるガラスの光と影の作品は、空間を自分の「好き」で包み込まれるものになる。

「好き」ととことんやれる環境にあったことは幸せなことだ。

その時々に関わった人々、そして両親に感謝したい。

私の「好き」は、他の人の「好き」になるよう、素敵なステンドグラスの作品をこれからも造っていきたい。



作品「木漏れ日」

○シンポ「広島サッカースタジアム建設予定地発見の近代遺構を考える」報告

～歴史的価値と保存・活用の検討～

広島サッカースタジアム建設の準備が進む中、事前の発掘調査において旧陸軍輜重隊の被爆遺構が発見されたが、市は大半を解体撤去しようとしている。その遺構の歴史的価値と重要性を多くの市民に理解してもらうために開かれたシンポジウムの内容を報告する。

主催：芸備地方史研究会

日時：2021年10月10日（日）13:00～17:30 場所：オンライン

☆ 1部：基調報告

基調報告1「サッカースタジアム建設予定地発見の近代遺構と保存・活用について」

広島大学名誉教授 藤野次史

広島は明治時代以来、日本陸軍の重要拠点であり、発見された遺構は軍都広島を中心施設の一部をなし、第一級の歴史資料といえる。遺跡は文化財であり、文化財は国民全体の共有財であり、文化の継承と発展の礎である。

遺跡保存と開発の両立は海外でも国内でも多くの事例があり、発見された遺構を保存しつつスタジアムを建設することは可能である。広島城跡及びその周辺が軍施設の中心であり、その具体的な遺構が姿を現したことは広島にとって千載一遇のチャンスと捉え、スタジアム内に遺構を整備・展示すると共に軍関係の情報を集約した資料館を建設すべきである。

さらに見学者の動線を整備し、原爆ドームなどと一体的に活用できるようにすれば、国際平和都市を標榜する広島市にとって貴重な平和活動の実践となるだろう。

基調報告2「近現代史研究の立場から見た原爆遺跡と戦争遺跡」

広島大学准教授 石田雅春

輜重隊の遺構は原爆遺跡であると同時に戦争遺跡である。原爆遺跡とは原子爆弾の被害を伝える遺跡のことで、一般的に被爆した建造物を指すことが多い。戦争遺跡は旧陸海軍に関する軍事施設を示すことが多い。

日本が明治以降に起こした戦争は、他国の脅威から独立を守る自衛の戦争であったと同時に、他国の領土や権益を手中に収めようとする戦争でもあった。このため戦争遺跡には戦争の加害の証拠という性格を帯びている。

広島城周辺の軍事施設の遺構はヒロシマの加害の側面と直接的に結びつくものであり、その議論を避けてはいけない。この遺構を壊すことは戦争加害の証拠を消し去ることになり、被爆都市ヒロシマの見識が問われている。公開の場できちんと議論すべきだ。

基調報告3「文化財保護行政からみた近代遺跡—とくに軍事関連遺跡の調査と評価」

広島大学客員教授 妹尾周三

広島では「被爆」に対する市民感情が大きく横たわっているため、「戦争遺跡」も「被災遺跡」もまとめて「被爆遺跡」と呼ばれることが多い。

また広島市は、「旧市内は原子爆弾によりそれまでの遺跡・遺構はすべて壊されており、埋蔵文化財はない」という考え方を持っている。また、文化財保護部局に埋蔵文化財の専門知識を持った職員がいない。そして教育委員会の諮問機関として市文化財保護審議会が設けられているが、あまり機能していないようだ。

サッカースタジアム建設用地の発掘調査による出土品も文化庁が作成した「出土品の取扱い基準」があるが、無視して多くは破棄するという。どうも行政を進めるうえで有用なものは保存し、そうでないものは破棄するという恣意的な基準で決めているようだ。

基調報告4「戦争の記憶と継承—近代日本の戦争遺跡研究」

元四川外国語大学教授 菊池 実

戦争記憶という時、日本、中国、韓国では大きな相違がある。日本国民にとっては1941年12月以降の太平洋戦争が主で、内地では1944年から本格化した米軍による空襲等々、外地ではガダルカナル島等々の敗退や戦後のシベリア抑留、満州からの引き上げ等々、戦争の犠牲者との意識が強い。1931年の満州事変から続く中国への侵略戦争という意識が欠落。

中国人にとっては日本軍による侵略戦争であり、それに対する抗日戦争である。韓国では1910年からの日本帝国主義による侵略と36年間の植民地支配である。

戦争遺跡は過去文化の「負の遺産」であり、忘れてはならない事実の厳粛なるモニュメントであり、今後は和解の場として機能させていくべきである。

☆ 2部：討論会（コーディネーター 県立広島大学教授 鈴木康之）

討論会を始める前に、1部の基調報告に対する質疑応答を終え、討論会に入る。

質疑応答

- ・ 輜重隊の遺構を残したままスタジアムの建設はできるのか？→スタジアムを支える柱・基礎の部分は壊すことになるが、それ以外は残して見学できるように建設された事例あり。
- ・ 遺跡保存と開発を両立させた施設の今の評価はどうか？→ギリシャのアクロポリス博物館の遺構展示は評判が良く、見学者も多い。大阪歴史博物館の地下にある難波宮遺構も同様。
- ・ 輜重隊の遺構の保存の署名活動をしているが、多く集めるにはどうしたらよいか？→市民に情報が開示されていないので、マスコミと共に情報発信を積極的に行う必要がある。
- ・ 遺構が保存できるように建設するためのタイムリミットは？→現在の市のスケジュールは、埋蔵物調査を2022年3月末で終えて本格的な工事着手の予定だが、一度立ち止まって保存活用の可能性の検討を行うべきである。遺構は一度壊すと元には戻らない。
- ・ 市の文化財に対する体制の不備について→ルール違反をしているのに無視しているのと同じ。文化財行政は国から県及び政令指定都市へ権限移譲しているが、広島市は移譲できる条件を満たしていないのではないか。

討論1 輜重隊の遺構に対する価値・評価

（藤野・菊池）陸軍の拠点施設の遺構は少ないなか、これだけ広範囲で、構造・規模などの全体像が明確な遺構は他に類例がなく考古学的に貴重である。調査研究することにより、明治以降の軍都広島の実態の一端がわかる。

（石田）近現代史を研究する上で考古学の成果に期待している。陸軍第5師団の遺構を通して、近代軍事史における輜重隊の位置づけ、陸軍の問題点等を考える資料となる。

（鈴木）市は十分な遺構の評価をしないまま、歴史的資料として価値が低いと判断し、解体撤去を進めようとしている。

討論2 輜重隊の遺構を保存する意義及び現状について

（石田）被爆遺構は広島と長崎にしかないが、長崎は爆心地が市街地から外れていたので被爆建築物が少ないという違いがある。陸軍施設の遺構は広島固有の問題である。

（妹尾）現場が近いのでよく見に行ったが、一般の工事現場のようであり、発掘調査をやったことのない人が作業しているように見えた。これが判断ミスの根源ではないか。

（菊池）市の埋蔵文化財に対する認識と専門職員がいないという話は驚き。明治以降の軍都広島と世界初の被爆都市として近代史上重要な遺構である。

討論3 輜重隊の遺構の保存・活用に向けての課題・展望

（藤野）下層の調査をするための遺構撤去をやめ、撤去した部材を元に戻し、スタジアムと遺構の両立を図る。

（石田）本来やるべきことをやらないという行政の不作为の罪は重い。文化財遺構は良好な状態で資料を残して後世に伝えていくことが使命。

（妹尾）破壊のための調査はやめて、公開と活用に向けた調査に切り替えて欲しい。中央公園全体も施設の建て替え時期に合わせて遺跡を確認・調査し、公開・活用を目指して欲しい。

（鈴木）市街地の再開発が進められているが、場当たりの対応ではなく、平和をアピールするために文化財を次の世代にどう伝えるか総合的なグランドプランを持つべきである。

（菊池）戦争遺跡を調査・研究し、保存・活用により広島の被害と加害の歴史を正しく学び、和解の場とし、原爆ドームと同様に人類に対して警告の場とするのが将来的な希望である。

討論4 最後に一言

（藤野）広く市民と情報を共有しながら、オープンに議論すべく情報発信をしていきたい。

（石田）歴史的価値あるものを拙速に壊していいのか。何を残すか未来の観点から要検討。

（妹尾）サッカー場が決まった経緯の説明が地元町内会に一切ないのはおかしい。

（菊池）現地を見れば驚きであり、マスコミに働きかけて広く市民に伝えなければいけない。

コメント

「よらしむべし 知らしむべからず」という広島市政の古い体質は市民の力で打破すべきであり、輜重隊の遺構保存はその試金石となる。（編集委員 瀧口信二）

○ 「Hihukusho ラジオ (第33回) 2021.10.30」 (*リンク参照) 報告

2020年6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (*リンク参照)」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第33回目の只野哲也氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター：土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト：只野哲也 (石巻市立大川小学校東日本大震災被災者、震災遺構の語り部)

インタビュアー：高垣慶太 (早稲田大学一年生)



被災前の大川地区・中央が小学校

—自己紹介及び東日本大震災の被災体験—

宮城県石巻市生まれの現在21歳。北上川が太平洋にそそぐ河口に大川地区がある。2011年3月11日、石巻市立大川小学校5年生のときに東日本大震災に遭遇。避難中、自身も津波に襲われるも一命を取り留めたが、我が家は流され、祖父・母・妹の家族や多くの小学校の仲間を亡くす。

避難所生活を送るなか、マスコミの取材を受け「大川小学校、奇跡の少年」と注目を浴びたが、周りに気兼ねして居ずらくなり、従兄弟が住む仙台に身を寄せる。

「石巻市震災遺構 大川小学校」HP:<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/okawa/index.html>

—被災後から現在までの活動—

被災後すぐ、大川小学校を解体するかという話が持ち上がったとき、遺構としてではなく真実に母校への愛着があり「校舎は残してほしい」と発言。卒業生たちとチームを組み、母校の保存を訴える活動を実施。多くの被災者はもう見たくないという気持ちが強かったが、残したいという子供たちの声に賛同する人も増えていく。

2015年に大川復興協議会が行った①解体②一部保存③全面保存の3案による住民投票の結果、全面保存案が僅差で決定。2021年7月に石巻市震災遺構・大川小学校としてオープン。

被災時のまま存置保存のため校舎の老朽化が激しく、任意団体を作って市の震災伝承推進室と連携して残し方を検討中。現在、震災の記憶を後世に残すため、語り部として活動。

—広島を訪れる—

保存活動時に、「広島原爆ドームのような存在になってほしい」と語ったことがあり、念願かなって広島研修を企画し、2021年8月5日から8日まで広島を訪問。

平和記念資料館には5、6日の2度足を運ぶ。最初のときは、亡くなった子供たちの名前と顔写真が展示されており、小学校の亡くなった友達の顔が思い浮かび感極まる。とにかく受け取るものが大きすぎて、最後の休息スペースで呆然と座り込んでいた。

2度目の時は、焼け焦げた弁当箱や三輪車のリアリティを感じ、靴底の音と泣きすする声しか聞こえない静寂な空間の中に周りの人との同じ思いを共有。また「原爆の子の像」が子供たちの運動により誕生した経緯の説明に大川小学校の保存活動と思いが重なる。

広島を訪れて、逆に大川小学校の遺構が外の人からどう見られているのか客観視できた。

—被服支廠を見て感じたこと—

被服支廠は全く知らなかったので見る予定はなかったが、7日の地元の若い人たちとの交流会で「保存・活用が議論されているから、是非に」と進められ、翌日案内してもらう。

レトロなレンガ造の建物で周りに生活感が漂っており、これが被爆遺構かと不思議に感じた。東北の津波による震災遺構は更地の中にポツンと建っているケースが多い。

爆心地から2.7km離れたところで、歪曲した鉄の扉を見て原爆の威力の大きさを知った。それまで被爆地は平和記念公園周辺だけかと勘違いしていた。

—遺構を残す意味—

今すでに小学生や中学生は東日本大震災のことを知らない人が増えている。同じ過ちを繰り返さないためにも震災の記憶を声なき証言者として後世に伝えてくれるのが遺構である。遺構の価値は後世の人が決めるものであり、次の世代に託したい。

コメント

東日本大震災の生々しい体験談は聞く人の心にしみてくる。その体験を通して得た教訓を後世まで伝承していきたいという志にエールを送りたい。(編集委員 瀧口信二)

○「第31回時代を語り建築を語る会」の報告

テーマ：第3回広島市平和祭再現の試み

—脚本案の検討と再現ドラマのリハーサル実施・反省—

ピースグラント2021において第3回平和祭の再現ドラマ企画が採択され、当時の式典を再現することを目指す。脚本に基づいて配役を定め、12月18日の本番に向けてリハーサルを行い、当日の段取りや役割分担等を検討した。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2021年12月3日（金）18:00～20:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



☆ 開催趣旨

平和祭とは現在の平和記念式典の前身で、第3回は昭和24(1949)年8月、当時の護国神社付近の市民広場で開催された。この年、広島県の憲法ともいえるべき「広島平和記念都市建設法」が制定・公布された。また世界的にもその存在が広く認知され、平和の意味を発信している「広島平和記念公園」コンペの入選案が発表された。さらに現在も残っている第2代目「平和の鐘」が新たに設置されたばかりであった。

この記念すべき年の平和祭を第一幕、第二幕として再現し、その後第二部としてこの式典への感想や反省について話し合い、これからの平和記念式典のあり方につなぐこととする。

☆ 再現ドラマ脚本案の提示

第一幕 当時、多分こうだったんじゃないか劇場

第3回平和祭の当時の記録や資料を参考にしてできるだけ忠実に再現したもの。主な登場人物は浜井信三市長、ロバートソン中将（代読者）、マッカーサー元帥（代読者）、ウオーカー中将（代読者）、幣原喜重郎衆議院議長（代読者）、吉田茂内閣総理大臣（代読者）、楠瀬常猪広島県知事、ほか。

第二幕 こんな報告があってもよかったんじゃないか劇場

平和祭の中では取り上げられなかったが、当時の状況を勘案すれば是非取り上げておきたいものを補足する。報告者と報告内容は、広島銅合金鑄造協会代表による平和の鐘と鐘楼制作過程の報告、広島市建設局土木課担当者による平和記念公園及び記念施設設計懸賞募集当選案の報告、それから寺光忠参議院議事部長の電報披露の3点を紹介する。

そして第二部

被爆後4年という時期の平和祭であることを考慮しつつ、第一幕、第二幕への感想、反省などを演者と共に意見交換。特に平和宣言の時代比較、GHQ関係者の発言内容、平和記念都市建設法の制定・公布直後との関連性を検証する。

☆ リハーサルの実施と反省

出演者は、日本都市計画学会中国四国支部会員有志、メルマガ「まちづくりひろしま」編集委員有志、響け！平和の鐘実行委員会有志、時代を語り・建築を語る会実行委員会有志から配役を決定。

素人集団ではあるが、司会者にフリーパーソナリティの三浦弘美さん（響け！平和の鐘実行委員会のメンバー）を迎え、まとまりのある朗読劇が可能となる。

シナリオの原作は今回の再現劇の発案者である石丸紀興氏。通しで読み合わせを行い、みんな疑問点等を出し合い、修正を加え、後は各自持ち返って推敲する。

舞台上のレイアウト及び立ち居振る舞いなどを確認し、朗読劇としてテンポよく進行できるように演出することとする。当日の役割分担として、受付係、撮影係、パソコン操作係などを決定し、会場設営や片付け等は全員参加。

最後に、コロナ感染対策を確認し合い、当日までにバックスクリーンに映すテロップや映像等の準備をし、台詞の練習を重ねることとする。

☆ 本番終了

昨年12月18日に本番を無事終える。再現劇はプロの司会進行の下、配役陣も頑張り、予想以上の出来栄で、後半の討論会も意義深いものであった。詳細は次号で紹介する予定である。

○[大イノコ祭りトークライブ \(オンライン\)](#) (*リンク参照)

～大イノコ祭り夜話～特別映像公開&トークライブ～

毎年、広島市中区袋町公園で開催される大イノコ祭りだが、今年度はコロナウイルスの影響で中止となる。

そこで2021年11月6日(土)20時～22時に特別映像公開&過去の映像を流して振り返るトークライブを開催し、YouTubeによる生配信(視聴無料)をした。

大イノコ祭りを支える市民の会のメンバー(石原悠一とtomoTほか)が出演し、広島のお祭りに対する熱い想いを語り合う。



YouTube 配信画面

亥の子祭りとは

昔から西日本の各地で行われており、子供たちが「亥の子石」を突きながら路上を練り歩き、万病除去や子孫繁栄を祈るお祭り。現在は少子化の影響でお祭りを行う地域が減少。

大イノコ祭りの歴史

大イノコは長さ13mの孟宗竹88本を直径20mの円周上に立て、竹の先端に結び付けたロープで1.5tの大石を結び、竹の張力を使って大石を空中に吊り上げる。(石丸勝三氏の考案)

その大石を「亥の子石」に見立てて大々的な「イノコ」を行う新たな「イノコフェスタ」として1990年に誕生。

しかし景気が後退し1996年で中断したが、2013年に国からの助成金があり新たな形「イノコ大福フェスタ」として復活。

翌年からは現在の「大イノコ祭り」に名称を変更。竹主による協賛金によって運営され、大イノコ祭りを支える市民の会を中心に地域住民と一体となって実施している。



裏祝祭の大イノコ大石突き

イベントと祭りの違い

広島にもいろいろなお祭りがあるが、イベント色の強いものが多いなか、大イノコ祭りは居住地や宗教などに関係なく全ての人に参加できる「お祭り」を目指している。

お祭りイベントの大きな違いは、屋台や夜店などによる金儲けが目的ではなく、祭るものを大事にして伝統・文化を継承し、地域の住民が主体となり、遊び心を持って、マニュアルを超えたハンド・ツー・ハンドで伝えていくものと思う。

大イノコ祭りの主な内容

大イノコ祭りは、広島に古くから伝わる亥の子祭りを元に創り出された。都市に居ながらも、自然を大切に思い、人と人が緩やかに関わり合う“場”として機能することを目指している。お祭りは88本の竹の立ち上げから始まる。お祭りの主な行事は下記のようになっている。

- ・石動(いするぎ)は祭りのシンボル。1.5tの大石を88本の竹の張力で空中に吊り上げる。大イノコ石吊りは子供たちや大人が竹の先端と大石を結ぶ綱を引っ張り、大石に結束させて石を浮かせる。大イノコの**大石突き**は子供たちや大人が大石の上に乗って大地を叩く。その跳ね返りのエネルギーのすごさに生かされていることを実感(体験談)。
- ・亥の子巡行は子供たちが本通りと金座街を亥の子を突いて練り歩く。
- ・はばたき(千羽鶴のお焚き上げ)は折り鶴の羽を一羽ずつ丁寧に広げ、2日間夜通しのお焚き上げをする。**餅つき**は子供も大人も外国人も参加し、後みんなに振る舞う。
- ・表祝祭(初日の夜)はかがり火をたいて芸事を奉納し、**裏祝祭**(二日目の夜)は大石の上から振る舞いの餅まき、若者たちによる大石突き、最後に綱切で終了。

みんなのアイデアで少しずつ変わっていくし、型ができていくのも祭りの良いところ。先輩のかっこ良さにあこがれ、若い人が受け継いでいくのが祭り。魅力的な「にぎわい」の創出と街文化形成が評価され、2019年に第15回ひろしま街づくりデザイン賞を受賞する。

石原悠一さん(大イノコ祭り監修)のコメント

祭りは、みんなが豊かに日々を暮らしていくための知恵だと思う。それぞれの得意なことを持ち寄り、折り合いをつけながら祭りは作り上げられていく。まさに全員が主役なのである。祭りを通した地域のゆるやかな繋がりが、まちをつくっていく。みんなで祭りをしよう!

○ 本「ヒロシマを暴いた男 米国人ジャーナリスト、国家権力への挑戦」の紹介

著者：レスリー・M・M・ブルーム 訳：高山祥子

1946年8月、アメリカの雑誌「ニューヨーカー」(8月31日号)の特集記事「ヒロシマ」が発売され、アメリカ中が騒然となる。

米国人ジャーナリスト、ジョン・ハーシーは広島への原爆投下とその影響を6人の広島在住者の証言により紹介し、原爆の恐ろしさを伝えた。

その結果、アメリカ政府の原子爆弾に関わる事実の隠蔽を暴露することになる。日本においてもGHQの検閲(プレス・コード)により原爆被害の真実は報道されていなかった。

ハーシーとニューヨーカーの編集者たちは、どのようにして政府の言論統制や検閲を掻い潜って、この大スクープを実現することができたのか、国家権力に挑戦した軌跡を追ったノンフィクションである。

臭い物には蓋をしようとする行政に対して真実を暴こうとするのがマスコミの役割であり、身近なところにも多くのことが隠されている。ジョン・ハーシーのような真のジャーナリストの登場を希う。

注) 定価：1080円(+税)、出版社：集英社、発行：2021年7月20日



○ 原爆資料館の展示「原爆ドームの軌跡」(世界遺産登録25周年) (*リンク参照)の案内

- ・期間：2021年10月22日～2022年3月31日
- ・場所：広島平和記念資料館・東館地下1階廊下壁面

□ 編集後記

繰り返し、繰り返し、今年1年を振り返ってみることが、今からの自分の進む道を明確にしてくれる。広島街であちらこちらに開発される計画が明らかになり、まさに将来の目指すべき広島街づくりがスタートしたように見える。

が、実のところ一体どういう街を目指して、いつまでに実現するのかわからない。何よりも被爆以来求め続けてきた平和記念都市の姿が思い浮かばない。それぞれの利益追求型の計画が並べられている。しかもその計画主体は、広島の人や企業が主人公ではない。

特にその対象地は平和記念都市建設を目指して払い下げを受けた都市公園など公共用地を利用する。広島市の首長はこれらと平和記念都市建設をどのように説明するのであろうか。

市民に本当に詳しく伝わっているのであろうか、また詳しく伝えようとしているのであろうか、この点を『まちづくりひろしま』は掘り下げる役割を果たしていく。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	響け! 平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表